

# 極楽浄土への憧れが具現化した九体阿弥陀堂

平成 30 年 3 月 3 日

横浜歴史研究会 齋木 敏夫

## はじめに

平安時代の 1052 年から末法の時代に入るという考えが貴族たちの間で広まった。実際に摂関政治が衰え、院政へと向かう時期で武士が台頭しつつあり、治安の乱れも激しく、民衆の不安は増大し、平安でなく不安の時代であった。この時代に先立ち、空也（903 年 - 972 年）は念仏を唱えて市中を廻り、民間における浄土教の先駆者となった。慈恵大師（元三大師） 良源（912 年- 985 年）は「極楽浄土 九品往生義」を著し、源信（942~1017）が地獄と極楽の様子を描いた「往生要集」を記したことにより、貴族たちは極楽往生を願って造寺、造仏をするようになった。権力者は九体阿弥陀堂を造り、九体の阿弥陀仏にお参りすることにより、上品上生から下品下生に至るいずれのお迎えがあっても良いようにと考えた。藤原道長が法成寺（廃寺）の中に初めて九体阿弥陀堂を造り、白河院、鳥羽院の院政期を中心とした 11 - 12 世紀には多くの九体阿弥陀堂が建立された。現存するのは木津川市にある浄瑠璃寺の九体阿弥陀堂のみだ。

## 末法思想

最澄が著した「末法燈明記」のなかで 1052 年から末法の時代に突入すると説かれ、これが広く定着した。釈迦が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる時代（正法）が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが修行者に似るだけで悟る人がいない時代（像法）が来てその次には人も世も最悪となり正法がまったく行われない時代（末法）が来るとする歴史観のことだ。1051 年には前九年の役が始まり、仏教界では天台宗を始めとする諸寺が腐敗や僧兵の出現によって退廃していった。このように仏の末法の予言が現実の社会情勢と一致した為、人々の現実社会への不安は一層深まり、この不安から逃れる為厭世的な思想に傾倒していった。貴族達は極楽往生を願い、競って豪華な寺を建てて極楽を観想するようになり、盛んに経塚造営が行われた。阿弥陀仏にすがることにより、西方にあると信じられている極楽浄土に往生できるという浄土教が広く信仰されるようになった。

## 智光曼荼羅

奈良時代の元興寺の僧、智光が夢に見た浄土を描かせたもので平安時代末にはこの曼荼羅が飾られたお堂が極楽坊と呼ばれるようになった。智光曼荼羅の前で祈りを捧げればどんなに罪深い人間でも極楽に往生できると多くの庶民の信仰を集めた。今でも極楽坊に上がれば厨子を拝観でき、裏側に回ると大きな彩色の美しい曼荼羅が見える。

## 當麻曼陀羅

奈良時代末頃の制作といわれる根本曼陀羅は国宝で平安末期には當麻曼荼羅が急速に脚光を浴び始めた。真ん中に極楽浄土の様子を描き、下方に右から左へと「上品上生の人には阿弥陀如来を中心にして観音・勢至菩薩、無数の化仏、比丘衆等がお迎え来て下さる。下品下生の人には阿弥陀他の迎は来ないが念仏を唱えれば極楽往生ができる。」という九品往生の様が描かれている。以降、當麻曼荼羅を中心とした極楽浄土信仰の拠点として天皇や貴族からも深い帰依を集めた。そして浄土宗の積極的な宣布を背景に中将姫の物語と當麻曼荼羅への信仰は広がった。

## 浄土三部経

「仏説無量寿経」「仏説観無量寿経」「仏説阿弥陀経」の三経典を併せた総称で浄土宗や浄土真宗は浄土三部経を根本経典としている。観無量寿経は極楽世界に往生する者を「上品上生」から「下品下生」まで九品に分類している。

### 空也 (903年～972年)

口称念仏の祖、民間における浄土教の先駆者、922年頃に尾張国分寺にて出家し、空也と名乗る。若い頃から在俗の修行者として諸国を廻り、「南無阿弥陀仏」の名号を唱えながら道路・橋・寺院等を造る社会事業を行い、貴賤を問わず幅広い帰依者を得た。938年京都で念仏を勧める。951年十一面観音像ほか諸像を造立し、口から南無阿弥陀仏の六体の仏像を出しているユニークな空也像が六波羅蜜寺に残されている。今も無形文化財として念仏踊りは残されている。

### 慈恵大師 (元三大師) 良源 (912年～985年)

大火災の後叡山を復興させた中興の祖、横川を東塔や西塔から分離独立させ、現在の元を築いた。「極楽浄土 九品往生義」を著す。良源はその著述において、「観無量寿経」の九品往生について解釈し、後の造寺、造仏、特に九体阿弥陀の造立に影響を与えた。

### 源信 恵心僧都 (942年～1017年)

當麻寺の近くで誕生、9歳で延暦寺に入り、良源に師事。15歳で村上天皇により法華八講の講師の一人に選ばれた。その際下賜された褒美の品(布帛等)を故郷で暮らす母に送ったところ、母は源信を諫める和歌を添えてその品物を送り返した。984年師・良源が病におかされたのを機に『往生要集』の撰述に入り、翌年『往生要集』を完成させた。この往生要集はきらびやかな極楽の様子を述べ、その対極にある地獄の恐ろしさ示した日本初の仏教解説書であり、貴族を中心とした上流階級の人達に愛読された。観想念仏とは浄土三部経の「観無量寿経」に説かれているもので阿弥陀や極楽浄土のありさまをできるだけ観想(思い浮かべる)することにより念仏を行うというものだ。今風に表現するとイメージトレーニングでこれは貴族の好みと一致した。観想念仏をする為の一番良い方法は寺を荘厳し、仏像を造り、極楽浄土のありさまを再現することだ。宇治の平等院鳳凰堂は観想念仏のために建てられたものだ。源信は日本の浄土教の祖と称され、法然や親鸞に大きな影響を与えた。浄土宗の開祖である法然は源信の主著「往生要集」によって7世紀の唐の僧善導の浄土思想を知ることができ、善導大師の教えを受容しているが為に、後世この書が法然上人から高い価値を見出されるものになった。

### 藤原道長 (966年～1028年)

藤原兼家の五男として誕生。990年兼家の長男の道隆が関白、次いで摂政となった。995年病で兄が死亡し、弟の道兼に関白宣下されるが道兼は就任わずか数日で死去し「七日関白」と呼ばれた。道長は兄の嫡男伊周と関白の座を争うが一条天皇の母后・東三条院(詮子)が弟の道長を愛し、逆に甥の伊周を疎んじており、道長を強く推したことにより勝利した。権力を掌握すると一条天皇に長女の彰子を入内させ皇后とし、次の三条天皇には次女の妍子を入れて中宮とした。三条天皇と対立が生じると退位に追い込み、彰子の生んだ後一条天皇を即位させ、摂政となった。栄耀栄華を誇って「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」と詠んだ。晩年になると頼通に家督を譲り、極楽往生を願うようになった。往生要集に書かれているように寺を建て、仏を造り、浄土を思い浮かべることが観想念仏であり、極楽浄土へ近道だと知った。

法成寺(ホツジョウジ)の前身無量寿院を建立し、初めて九体阿弥陀堂を造った。死に際して法成寺の本堂に床を敷き、本尊阿弥陀如来と自分の手を五色の糸でつないで臨終を迎えたといわれている。

### 同聚院

東福寺塔頭の一つ、924年に関白藤原忠平が法性寺(ホツジョウジ)を建立し、菩提寺とした。藤原道長が1006年に法性寺の境内に造営した五大堂の跡といわれている。仏師定朝の父、康尚(コウジョウ)が五大明王像を造った。五大堂の中尊で唯一残っているのが2、65mもある不動明王坐像(重文)だ。日本最大の木像不動明王坐像で憤怒の相よりも優美さが目立つ。康尚は彫りの浅い和様、寄木造を始め、定朝がそれを完成したといわれている。同聚院の近くに法性寺という寺があり、不動明王坐像の摸刻像がある。なおこの寺には旧法性寺の27面観音像(国宝)が遺されている。なお旧法性寺の跡には九条家の菩提寺である東福寺が建っている。

### 藤原頼通(992~1074)

道長の長男、関白を50年の長きに亘って務め、父道長と共に藤原氏の全盛時代を築き、1052年道長の別荘であった宇治殿を現代に残る壮麗な平等院鳳凰堂に改修した。天皇の后にした娘が男子に恵まれなかったばかりか女真族の一派とみられる集団を主体にした海賊が壱岐・対馬を襲い、更に筑前に侵攻した刀伊の来寇、房総三カ国で1028年に起きた反乱で平将門の乱以来の大規模な反乱であった平忠常の乱・1051年から1062年までに要した前九年の役など戦乱が相次ぐ等、朝廷の内外からそれまでの絶対的な権力体制を揺さぶられる事態が生じた。そこに加えて晩年には頼通と疎遠な後三条天皇が即位したこともあり、摂関家の権勢は衰退へ向かい、やがて白河天皇が即位し、院政と武士の台頭の時代へと移ることになった。

### 宇治平等院

1052年は末法初年に当たるとされ、末法思想が貴族や僧侶らの心をとらえ、極楽往生を願う浄土信仰が社会の各層に広く流行していた。翌年には阿弥陀堂(鳳凰堂)が落慶し、堂内には平安時代の最高の仏師定朝によって制作された丈六の阿弥陀如来坐像が安置され、華やかさを極めたとされている。定朝はこれにより僧綱の法橋になった。鳳凰堂(中堂・両翼廊・尾廊)4棟からなり阿弥陀如来坐像と木造雲中供養菩薩像共に国宝、庭園は史跡名勝となっている。「極楽いぶかしくば宇治の御寺をうやまえ」といわれた。大勢の観光客で賑っているが当時の貴族達は極楽に行く為に造寺造仏を行う自利の為であったようだ。境内全体が世界遺産となっている。

### 即成院

泉涌寺の塔頭、藤原頼通の第三子橘俊綱が祈願主となり1094年頃本尊阿弥陀如来像と二十五菩薩像26体(重文)を伏見に造営した。伏見城築城に伴い深草に移転、さらに明治の廃仏毀釈の難を逃れて現在の京都東山に移った。仏像は定朝の工房で造り始められたようだ。また那須与一ゆかりの寺で合戦の前、京都での療養中、即成院の阿弥陀如来を信仰し、その靈験で病が癒えたことから、阿弥陀如来の仏徳を感じ、合戦後、源平の戦いで亡くなった人々の菩提を弔う為に出家し、即成院に庵を結んで没した。毎年10月には上品上生の来迎を模した二十五菩薩練供養が行われている。

### 六道珍皇寺

鳥辺野の入口にあたり、現世と他界の境にあたりと考えられ、「六道の辻」と呼ばれていた。創建は延暦年間(782年~805年)、鎌倉時代までは東寺の末寺として多くの寺領と伽藍を有したが、南北朝時代以降、寺領の多くが建仁寺の所有に転じたことと戦乱により衰退した。

建仁寺から僧が派遣されて再興、この際に臨済宗に改められた。「冥土通いの井戸」は小野篁が冥界への往路に利用したと伝えられる。

#### 小野篁 (802年 - 853)

平安時代前期の役人、学者であり歌人。遣唐副使にも任じられ2回に亘り出帆するが、いずれも渡唐に失敗する。三度目の航海にあたって、遣唐大使・藤原常嗣と争い、乗船を拒否したため隠岐に流された。「わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人の釣舟」 参議篁流刑地の隠岐で詠んだ歌といわれる。840年罪を赦されて都に戻り、活躍した。伝説で朝(昼間)は朝廷に勤め、夜は冥界で閻魔王の副官をしていると恐れられていた。

#### 小田原山 浄瑠璃寺

寺名は薬師如来の居所たる「東方浄瑠璃世界」に由来する。1157年に作庭された浄土式庭園(特別名勝、史跡)は中央に池を配し、西側に本堂の九体阿弥陀堂(国宝)があり、九体の阿弥陀如来坐像(国宝)は中尊が来迎印、8体が阿弥陀定印を結ぶ。東側には薬師如来坐像(重文)を安置する三重塔(国宝)が置かれている。これは西の彼方に阿弥陀如来の住まう極楽浄土(西方浄土)が東方には薬師如来の住まう浄瑠璃浄土(東方浄土)があるという浄土思想の教えに基づいたものだ。衆生は現世、来世共に幸せを求める風潮があったことでしょう。このような浄土式庭園は平泉の毛越寺、奈良円成寺、金沢文庫の称名寺にも見られる。本堂は庭園が策定された時に建てられたもので建物は一重の寄棟造、瓦葺で長い横幅が特徴だ。池を挟んだ対岸に位置する三重塔(国宝)は1178年に京都一条大宮から移築したと記されている。塔は三間三重の檜皮葺、初重周囲には高欄の無い縁が二重、三重には高欄が巡らされており、中央間には板唐戸が脇間には連子窓が設けられている。塔は初重内部に心柱や四天王柱といった柱を設けず、心柱は二重目から立っている。初重内部に柱を設けない構造の塔は浄瑠璃寺のものが最古である。初重に柱が無いスペースを広く使えることから、仏像を安置するのに適しており、本尊である薬師如来坐像が祀られている。木造四天王立像(国宝)は寄木造で安時代後期の作、4体のうち広目天は東京国立博物館、多聞天は京都国立博物館に寄託され、持国天、増長天が本堂内に安置されている。

#### 九品仏浄真寺

下品(ゲボン)堂、上品堂、中品堂と三つの阿弥陀堂があり、それぞれに3体、合計9体の阿弥陀如来坐像(都指定)が安置されている。下品堂の像は来迎印で親指と人差し指を結ぶ上生、親指と中指を結ぶ中生、親指と薬指を結ぶ下生の印相を表し、上品堂は阿弥陀定印、中品堂は説法印を結んでいる。本堂は西向きで現世の此岸(カソ)を、三仏堂は東向きで浄土の彼岸をあらわしている。

#### 後世への影響

平安時代は貴族の仏教が主体であったが浄土信仰は徐々に庶民へと広がり、平安末には往生要集により善導大師の存在を知った法然は浄土宗開を開き、親鸞が浄土真宗を起し、空也上人の影響を受けた一遍が時宗を開き、浄土系の宗教が盛んとなった。寺の本堂は外陣が広くなり、多くの信者が本尊を拝めるようになった。

参考文献 古寺を巡る平等院 小学館  
平等院と極楽往生 小学館